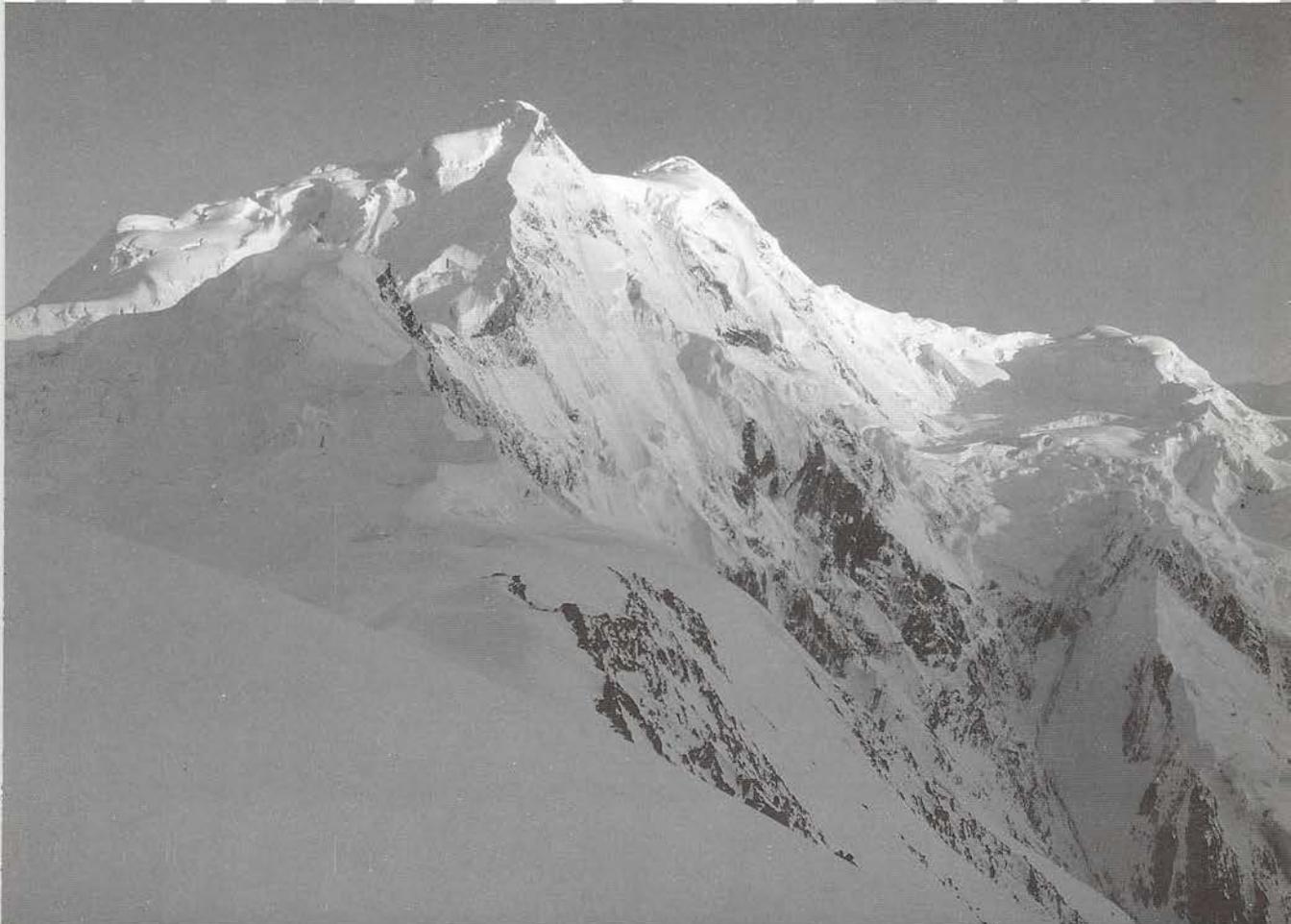


HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 352



2001 MARCH



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

2002年H A J 登山隊隊員募集

八千メートル峰 シシャパンマに新ルートを求めて

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ（夢）を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

1990年代に入り日本隊では、90年チョゴリ北西壁下部（横浜）、95年マカルー東稜下部（JAC）、97年K2西壁上部（JAC東海）など部分的な開拓が行われ、94年山野井泰史が単独でチョー・オユー南西壁に新ルートを開拓した。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027mとした場合、中央峰の標高が8,008mとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央部に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年H A J隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂しないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだ

ろうと推測される。しかし、中央峰を登った岳人たちはそこが「8,000m」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。中央峰の標高が8,000mを切ることも有りえない訳ではないだろう。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的な困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えています。意欲ある岳人の参加を期待します。

記

1. 時期 2002年秋 50～60日間程度
2. 募集人員 10名程度
3. 負担金 100万円
4. 申し込み、問い合わせ H A J事務局

表紙写真

ハラモシュ・ラは、バルチスタンとギルギット地方を劃する5,000mの峠。マニピーク(6,685m)は、尾根続きのハラモシュ(7,397m)には高度でははるかに及ばないが、峠から間近に仰ぐだけに、雪をたっぷりとした山容は堂々として見える。1958年にハラモシュを目指したオーストリア隊によって初登頂されている。マニピークの名は北側の氷河名をとって同じオーストリアがつけた。
(文・写真：東野 良)

ヒマラヤ No.352

1. 雲母の谷の輝ける峰
15. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
17. 氷河の旅① ハラモシュ・ラを越えてー1
21. パキスタン新ビザ政策について
24. 寸感・事務局日誌

きらら 雲母の谷の輝ける峰

— スパンティーク (7,027m) 全員登頂の記録 —

はじめに

2000年夏、日本ヒマラヤ協会としては初めてパキスタンでのサマー・キャンプを行いました。目標の山は、小カラコルムに聳えるスパンティーク峰 (SPANTIK 7,027m)。

メンバーは、個性豊かな隊員6名と私。ヒマラヤ初見参の者も居れば八千メートル峰登頂者も居たりして。

夏のパキスタン、暑いあついらワルンピンディ、氷の上のベース・キャンプ。

色々ありましたがそれぞれ頑張って (フー) ク

リアして、全員登頂を勝ち取りました。以下にその報告をします。 (記：岩崎 洋)

隊の構成と結果

隊長：岩崎 洋 (40 神奈川)

隊員：大神田伊曾美 (56 東京)

〃：保坂 巖 (45 山梨)

〃：高橋 敏雄 (41 宮城)

〃：鈴木 正典 (38 山形)

〃：大場裕美子 (33 静岡)

〃：小泉 太史 (29 埼玉)

結果：8月15日



ベース・キャンプを目指して

16.July.00 4:59 日バ旅行社(民宿シルクロード) 出発。
~17.July.00 2:15 チラス着

7月14日 イスラマバードの空港に先発隊の岩崎隊長、鈴木隊員の出迎えをえる。2日間をかけ、全ての事務手続き等を完了。16日の早朝、隊員を乗せたコースターはカラコルムハイウエーの中間地点チラスに向けて民宿シルクロードを出発した。

モンスーンの影響かタキシラのガンダーラ遺跡を通過する頃から延々と雨が降り出す。日バ旅行社の督永さんの話では季節が3ヶ月ずれ、先月まで40度を超える熱帯夜が連日続いたそうである。

ターコットの峠からインダス川に一気に下り、カラコルムハイウエーに入る。時折、強い雨が吹き付けて落石がカラカラと側面の壁から落ちてくる。不安が的中し、土石流が発生し通行止めになる。長いこと車中で待たされたがブルドーザーの活躍により未明に復旧。月明かりが美しい午前2時に本日の宿泊所チラスのパノラマホテルによく着き、遅い夕食を取る。

17.July.00 10:00 チラス(パノラマホテル) 出発。12:21 ジャグロット 19:30 スカルド到着

日本の道路と比較してはならないがカラコルムハイウエーは身の危険を感じさせずにはおかない道である。インダス川の崖を削り、岩が庇になっているため落石による堆積物が道路きわに山になっている。白い石が路肩の目印でハンドル操作を誤れば垂直の崖を落下しインダスのも屑と消えるに違いない。是非とも命のスペアが欲しくなるような道である。

崖の下はミルク状の濁流が飛沫を散らし、狂ったように渦を巻きながら、怒濤のごとく流れている。兩岸の絶壁は垂直に天に伸び、スカルドへの道は長く険しい。

途中、カラコルム、ヒマラヤ、ヒンズークシュの3大山脈の末端がインダス川に下っているジャンクションピークの記念碑を後にする。インダスの上流は兩岸の壁がせまり、その中腹を削り取った一本道がスカルドへと導いている。

▼スカルドって食糧の買出し



夕闇迫る頃スカルドに到着。スカルドの入口にはチェックポストがあり、そこを越えるとインダスの様相は一変し穏やかになる。川幅も数百メートルから数キロの広がりを見せ、幾筋もの緩やかな流れを作り、その間には砂州や浅瀬が広がる。乾燥したこの時期には河原の砂が風と共に舞い上がり、かすかに霞んでいる。砂嵐で有名なスカルドはインダス川からチリ状の粉塵が吹き付け目も口も開いていられないとのこと。(スカルドの先は筆舌に尽くしがたい悪路の連続で未舗装のジープ専用路となる、当然一般車は走行できない。)

18.July.00 スカルド滞在

本日はスカルドの町で野菜などの食料品及びケロシン200Lを購入。

スカルドの町は小さいながら北方地域最大の町である。商店街が軒を連ね、通りを行き交う車や人の波に生活の息づかいを感じる。

日本への国際電話もかけられる。また、卵、野菜、果物、肉、乾物類も豊富にあり、その他日曜雑貨品を含め中古の登山用品も多少は揃えられる。

19.July.00 6:40 スカルド出発。10:50 チュートロン村(温泉で入浴及び昼食) 12:55 出発 14:30 最奥の村アランドゥ到着。

隊荷をジープに積み替え、3台でスカルドを出発。町を過ぎインダス川を渡る手前から未舗装になりアランドウの村まで悪路は続く。途中のシガールの町は収穫前の小麦の穂が揺れ、インダスの恵みを得て黄金色に輝いている。ドコ村まで体全体がシェイクされているように振り回され、ジープの隊荷から振り落とされないように必死にしがみつく。埃で真っ白になった頃、唯一の温泉チュート

ロン村に着く。

下着を着けて入浴することになり違和感を感じるが一時の旅の疲れを癒してくれる。

その後、数回吊り橋を渡るとドコ村に着く。村の中心部を通る道には土壁の軒先が張り出し、どこが道か、庭先に入る路地か、判別がつかない。更に道は険しくなり、右岸をへつるように造られた道は路肩からタイヤを半分はみ出させ、危険極まりない所も出てくる。再び埃でまみれ、無名の白い峰々が周囲を囲む頃、チョゴルンマ氷河の舌端が見えてくる。その氷河の張り出し地点が最奥部落アランドウ村(標高2,800m)になる。また、キャラバンの出発地点でもある。

20.July.00 8:00 アランドウ村出発。 13:00 マンビホーラ到着

40名のポーターを雇いキャラバンが始まった。踏跡のしっかりしたチョゴルンマ氷河舌端中央から取り付き、氷河左岸のアブレーションバレー(氷河の両サイドに氷河の運搬作用により堆積した砂と岩屑による自然堤防)に登山道は続いている。マンビホーラまで丈の短い草が茂るトレッキングを楽しむ。

21.July.00 6:54 マンビホーラ出発。 14:00 ボロチョ到着

マンビホーラからのどかなトレッキング道を進む途中、氷河へ20mほど急降下を強いられ、足元の砂と石が次から次へと崩れ緊張させられる。再度アブレーションバレー沿いに進み、間もなくカルカのボロチョに到着し幕営する。落ち着いた後、支援してくれた方々へ御礼の手紙を書く。

明日からの行動はアブレーションバレーに終止符を打ち、氷の世界になる。クレバスを縫いながら真っ白なチョゴルンマ氷河をキャラバンする。

22.July.00 5:47 ボロチョ出発。 9:00 仮BC着。(スパンティック正面奥からバズィン氷河は発生し、氷河中央部にBCを設置予定、バズィン氷河によって左右に分けられた左の尾根が南東稜ルートである。チョゴルンマ氷河とバズィン氷河の合流地点はセラック地帯でグサグサに成っており氷河本流を垂直に登り詰めることは困難が予想される。その為、一旦、バズィン氷河とチョゴルンマ氷河の合流地点手前にある右の尾根に取り付きコルを越えてバズィン氷河に再び下るルートが取ら

れた。その尾根の取り付き地点が仮BC) 14:54 BC偵察出発 15:00 コル着4,630m(バズィン氷河へ下る) 15:56 BC着。(バズィン氷河上にブルーシートを引きその上にデポ) 17:20 仮BC着

ボロチョからはアブレーションバレーののどかな山道は終わり、氷河歩きとなる。乳白色の氷雪原は大小のクレバスがいたるところに走っているため迂回や飛び越えがあるが安定している。ルートは正面に見える尾根を越え、反対側のバズィン氷河に降り立つ。尾根の取り付き地点からコルまでは一本の線状に茶褐色に変色しており、縦縞に流れているようにも見える。チョゴルンマ氷河からも確認できる。

コルへの取り付き地点を仮BCと位置づけ、本日の幕営地とする。一端、チョゴルンマ氷河を離れ正面、右側のモレーンをトラバース気味に上がった上部が仮BCである。連絡官がフィックスを張れと文句を言っているが無視する。

コルへのアプローチは北アルプス北尾根の3、4のコル上部並の傾斜で高山植物が咲き乱れている。午後から体調の良い者はBCまで往復する。

ポーターを仮BCで半数解雇し、残りのポーターで隊荷をBCまで荷揚げする。ところがBCへ出発直前に賃上げのストライキに入ってしまった。膠着状態のまま、すでに1、2時間は経過している。

契約外の賃上げの原因は今では亡き広島隊が仮BC、BC間の約3時間の行程に500RSもの大金を支払ったため、それを知っていたポーターが全員に話を流したことに起因する。また、また、インフレの原因は過去の日本隊にあった。彼らは広島隊の例を出して一向に引こうとはしない。ポーター一人一人は素朴でよい人たちであるが、集団心理が働き興奮状態になると目つきも険しくなり危険な雰囲気になる。

これ以上長引かせても利益にならないと判断、料金の上乗せを約束しBCへ出発する事になる。渉外の難しさや隊長の責任の重さを痛感する。

隊長、鈴木、高橋の3名でBCへ偵察に行く、コルまでの草付きの急登は草花が咲き乱れ、余裕があれば写真撮影に励むのだが、ポーターとの氷河歩きに体力を消耗しその余裕はない。

コルから右へトラバース気味にバズィン氷河に

下り、先行したポーターは足早にBC予定地に荷を下ろすとさっさと仮BCへ引き返していった。現金な輩である。

23.July.00 6:35 仮BC出発。 8:17 コル
8:50 BC到着

仮BCからBCへ向かって出発。連絡官が遅く、山登りが初めてのような歩き方である。コルまでの急な草付きは、先行した20名のポーターが歩いた後だけに踏み跡がしっかりできていて昨日と比較にならないほど歩きやすい。コルから約20分ほどでバズィン氷河に下り、小雨の中ベースキャンプ作りを行う。午後からは昼寝で過ごす。

24.July.00 休養日

昨日から雨が降り続けている。一向に止む気配がなく時折落石の音がする中、トランプや花札に興じる。

25.July.00 休養日

7時30分起床、2日間降り続いた雨は上がったものの青空は見えず時折、陽が射し込む程度である。

本日はフィックス用ロープを50Mの長さに切る作業や笹竹に蛍光テープを取り付ける作業を行う。レーション分けは大神田さんが専念し、昼食まで各自の仕事に専念する。パスタの昼食に隊員皆大喜びである。5Lワインを賞味し禁酒国への持ち込みに思いを馳せ、苦勞を知る。残務整理を終わらせ明日以降の準備を各自行う。氷河の冷水も工夫次第で洗濯や洗髪等、冷たくなく洗うことができる。スパンティックも顔を見せとても幸せな一日であった。

26.July.00 7:03 BC出発 7:31 南東稜取り付き 13:30 南東稜稜線 15:38 デポ地出発 18:11 BC到着。

鈴木、高橋、保坂（通称A隊）で南東稜の壁にルートのをばす。壁は氷雪壁で陽がバズィン氷河全体を照らすと水氷になりスクリュウハーケンは入りやすいが手袋が濡れてしまう。最悪なことに最上部左側の凹地から水が噴き出し潰け物石がブンブン唸りながら降ってくる。一発当たれば即死である。身の危険を感じながらのフィックス工作は緊張感の連続である。久々のルート工作は途中メインロープとフィックスロープが絡んだり、足

▼アランドウにて出発準備



りなくなるなど息が合わなく危険地帯の通過に予想以上に時間がかかった。常にリードする鈴木隊員と私自身の技術、体力の格差を痛感し、50M、5本を張り終え、稜線上に抜け出る。

チョゴルンマ氷河の源頭はスパンティックとMt.マルピディンとの最低鞍部に発している。その並びにライラなど7000M級の峰々が城壁のように連なりヒマラヤひだがとても美しい。

雪面に露出している岩の上に未使用のフィックスロープをデポしBCへ下降する。

〔B隊の行動〕

BC～5000m（C1荷上げデポ） 8:00 B隊（岩崎、大神田、大場、小泉）が後発

A隊は氷河を抜けた取付き地点から稜線に抜ける斜面のルート工作として先発する。後を追うB隊はC1の荷揚げを行う。昨年と違い取付き地点の雪が少なくA隊のルート工作は時間がかかる。それと同時に落石の数が半端ではない。ずっと緊張しっぱなしで落石のたびに、左右へ逃げまどう。当たったら死んでしまいそうだ。斜面の中間まで上がると落石ポイントから離れ、とりあえずほっとするがそこから斜面の角度が一気に上がる（45度位）

A隊のルート工作を、そこそこの急斜面上で待っていないとならず、ふくらはぎがパンパンになって行く。稜線に出たときにはかなりの疲労を感じ座り込んでしまった。そこから1時間ほど歩いた稜線上に岩稜帯が有りそこにC1の荷物をデポし、下山開始。ルート工作した斜面を夕方通る事にし、少しでも落石の数を減らす様にする。16時30分、懸垂下降で斜面を降りる。10P懸垂し斜面取り付

き点へ。ガレ場を通り、氷河上のクレバスを時々ジャンプしながら渡りBCに戻った時にはふらふらだったが我が家に帰って来た様な喜びがあった。

27.July.00 5:00 (A隊が先行し、時間差でB隊が続きC1建設行う。) 7:40 南東稜稜 12:24 C1到着 15:31 C1出発 18:40 BC到着

落石の危険を避けるため、陽がバズィン氷河を照らす前にベースを後にする。放射冷却のため氷河はコンクリート状で歩きやすい。ユマーリングで氷雪壁を3分の2程登り切る頃から落石発生、点発生から放射状にイレギュラーに飛んでくるが、危険地帯を無事通過する。A、B隊が稜線に集結後アンザイレンしてC1予定地に向かう。稜線上にもクレバスが大小走り、腰まで潜り込むような穴もある。

小ピークをいくつか越えるとロシア隊のテントがあり、前方に立ちはだかるスノーピークにロシア隊と思われる3人の姿が点となって見える。今回のフィックス工作はこの急な斜面になる。

チョゴルンマ氷河の全容が見渡せ氷河の皺が一つ一つ巨大なクレバスとなりアランドウ村まで続いている。年に何m流れ下るのか自然の驚異に圧倒されてしまう。C1建設終了。(標高約5,200m) [B隊の行動]

BC~C1 5,200m (C2荷上げ、C1デポ地から荷上げ) 5:30 B隊後発

昨日の落石を避ける為に早めの出発となる。落石の多い斜面に取り付き緊張の連続で動かない足も無理に早足になって登ってゆく。不思議なものだ。何度か落石があったが前日に比べ数段減り、早めの行動に感謝する。すぐにルート整理中のA隊に追いつきFIXロープの順番待ちとなる。稜線に出て最後に登ってくる岩崎さんを待っている間、自分のテルモスでお湯を飲み、それを足元においていたら、スーッとテルモスが氷河に落ちていってしまった。幸いなことに岩崎さんには当たらなかったのは良かった。しかし大切な山道具。すごく寂しい。大神田さんが「身代わりになってくれたんだよ。」と言ってくれた。そこから稜線を延々と歩き続ける。A隊は先行していった。デポしてある残りのC1荷物をザックに詰めC1へ。途中ロシア隊のC1テントを発見。どうやら

▼BCよりスパンティーク峰を望む



C2に向かっているようで蟻のような3匹がC1より先の大きな斜面(スノーピーク)を登っているのが稜線上から確認できた。C1についての頃には先発のA隊はビールを飲み、のんびり休んでいた。(13:00) C1にC1、C2荷物をデポしロシア隊の動きを観察しながら写真撮影、レーションを食べ(15:00)下山。17:00稜線から氷河へ。19:00BCへ戻る。

28.July.00 休養日

一日休養日、8時にチャイをいただき、各自洗濯や洗髪等思い思いに過ごす。私は、チラスのホテルで侵入した南京虫に足首や腰回りを刺され、そのかゆみは筆舌に尽くしがたい。氷河上にブルーシートを広げ、強烈な紫外線で日光消毒を行う。 [B隊の行動]

今日は休養日。天気もよく洗濯、掃除をしたりしてゆっくりする。お昼は大神田さんメニューでチラシ寿司、高野豆腐の煮物、オニオンサラダ、ポテトフライ、海藻の煮物、おいしい物ばかりだ。体の疲れからくる体調不良で隊長から薬をもらい昼食後飲み、昼寝。全員が氷河の水で冷たいと言いながら洗濯。シュラフを干し洗濯物を干しそれぞれのテントでゆっくりしている。

29.July.00 休養日

30.July.00.sun 5:00 BC出発。C1へ向かう。6:05 南東稜取り付き、アイゼンを履く。8:20 稜線そしてC1へ。11:00 到着 13:04 スノーピークのルート偵察及びフィックス張りにC1出発。15:00 スノーピーク下部斜面に1ピッチ、フィックスを張り、本日のルート工作終了C1へ戻る。17:58 C1到着。

A隊3人で落石を避けるため、BCを暗いうち

▼C1



に出発。快晴の休養日が2日も続き、氷雪壁に張られたフィックスのスクリュウハーケンは全て浮いている。下部は諦め、傾斜のきつい上部だけ張り直す。

太陽がバズィン氷河を照らすと上部崩落地帯から落石の雨が頻繁に降り注ぐ。それまでに氷雪壁の3分の2を登り終えていないと危険である。個人装備の荷に喘ぎながらも安全圏に入るまで早いユマーリングを繰り返す。C1到着後、スレート状の岩を並べC1テント整地を行う。

ロシア隊の3人が登頂に成功し下山の途中C1に立ち寄った。不慣れな会話であるが登頂を祝福し、貴重な情報を得る。C2上部から山頂までは膝下の雪でフィックスは必要ない、しかしラッセルが深く大変苦労したらしい。

その後、鈴木、高橋でスノーピークの偵察を兼ねながらロシア隊のトレースをたどる。雪が腐り苦労するがスノーピーク下部に1ピッチのフィックスを張り終え、明日からの行動に弾みを付けC1へ戻る。

〔B隊の行動〕

休養日 先発のA隊を見送り再度シュラフの中へ。テント内が暑くなってきた8時頃に起きテント位置移動の為氷河上を整地する。

31.July.00 5:10 C1出発。 7:10 スノーピーク取り付け。フィックス工作 10:00 スノーピーク下部斜面フィックス終了、上部斜面フィックス工作へ。 12:12 C2予定地着、デポ 12:40 C2予定地出発 15:00 C1到着 B隊行動 BCからC1へ

3時起床、夜が明け切らぬうちにルード工作へ。前日の偵察とは打って変わって雪が締め歩きや

すい。C1からスノーピークまでに2つほどピークを越さなければならない。手前のピークは主稜線通しに歩けるが、二つ目のピークは、二重山稜状で雪面が締まった条件ならば主稜通しに、腐りだしたら安全面を考慮して左側を大きく迂回しても良い。山全体のスケールが大きいため、見えていてもスノーピーク取り付けまで2時間を要した。スノーピークの全容は下部7本のフィックス、傾斜が緩くなる岩稜帯、そして上部3本のフィックスを必要とする。

下部7本終了後、にわかには天候が崩れ小雪から風雪に変わった。引き上げようかと思いきや回復し、続けて上部フィックスを張ることになる。昨日のロシア隊のトレースが僅かに残っており、スレート状の岩稜帯を越え上部3本も問題なく張り終えた。喘ぎながらスノーピークの頂稜を越えるとC2予定地まで近い。張れていれば足下に見えるはずである。小雪が舞い視界が利かないため、標識を2本ほど立てC2予定地の最低鞍部へ下る。ロシア隊の幕営地跡にスノーバーなどを残置し、C2予定地として後にする。

よれよれでC1に戻るとBCを早朝出発したB隊が既に到着しており、冷たいジュースで喉を潤す。その後、アンザイレンせずにとってきた点を指摘され、隊長から苦言を言い渡される。反省、反省。

〔B隊の行動〕

BC～C1荷上 後発のB隊、C1に向けて出発。氷河を抜けガレ場に取り付き薄く凍結したところを渡ったところ2度ほど転倒。2度目の転倒時にピッケルが跳ねピッケルの石突の先端で左目を突いてしまう。一瞬しまったと思ったが後の祭り。とりあえず目を開けてみたら左目の視力は落ちていなかった。出血でコンタクトレンズが取れたので小泉氏に軽く見てもらったら「左目下を切ったよ。」との事。とりあえず落石を恐れ右目コンタクトのみで稜線に上がり再度、小泉氏に確認してもらおうと左目左側白目も突いてしまった模様。とりあえず岩崎さんが上がって来たら報告することにする。今は大丈夫だけど、黒目の血管が気圧の関係で切れたら大変という事でC1に着いてからおとなしく目を冷やし雪目用目薬をつけたりしてしゅんと

している一日だった。夕方A隊がC2までルート
工作をし、疲れた状態で戻ってきた。

1.AUG.00 停滞

昨夜から一晩中みぞれ混じりの雪が吹きつけ、
停滞と決定。本来ならば、C2へ全隊員で荷揚げ
に行く予定であったが諦める。苦労した前日のト
レースが埋まらないように祈るだけである。次第
に、ぐずづいていた空も時折陽光が差し始め、午
後には回復した。

前日ガラ場で転倒し、左目をピッケルで傷つけ
た大場隊員の事が心配である。目の充血や腫れは
次第に引いているように思えるが、どこでどんな
アクシデントが発生するかわからないため、自戒
を込め気を引き締める。

2.AUG.00 5:00 C1出発。本日C2へ荷
揚げ 8:00 スノーピーク5ピッチ目で高橋
が体調不良を訴え、鈴木隊員のサポートでB
Cまで下山開始。 15:00 (鈴木、高橋) BC
到着 13:30 (B隊、保坂) C2到着荷物を
デポし下山 18:00 C1到着

A隊、B隊、3時起床で5時出発。雪も良く締
まり、A隊3人がアンザイレンをして先行する。
約2時間でスノーピーク末端に到着。途中、朝日
に輝き、真っ赤に燃えるマルビディン峰やライラ
峰の7,000m級の山々に見とれる。

前日の雪でスノーピークに張られたフィックス
ロープは埋もれ、掘り出しながらユマーリングす
る。最初の2ピッチは氷化しており、つま先2本
しか刺さらず足首が悲鳴を上げる。また、雪が付
着したフィックスロープはユマールが利かずズル
ズル滑り、体力の消耗を加速させる。5ピッチ目
で高橋が体調不良を訴え、鈴木隊員とBCまで下
ることにする。休んでも心拍数が下がらず、過呼
吸の状態になる。一刻も早くBCに戻ろうと思う
が多少の登りでも息が苦しく一向に距離を稼ぐこ
とができない。バズィン氷河への下降地点到着時
には12時を回った。天候は安定せず、空模様も昼
だというのに夕暮れ時の薄暗さである。風も出て
きた。

スノーピーク途中で別れたB隊の荷揚げは順調
に進み、C2に到着した旨の連絡がトランシーバー
から流れる。

バズィン氷河への懸垂下降中、みぞれ状の風雪

になり周囲は白一色に染まる。雪まみれで氷河に
降り立ち、ふらつきながら鈴木氏の後を追う。ず
ぶぬれでBCテントに転がり込む。スパンティーク
全体が風雪に覆われた。C2にいる隊長を始め
隊員のことが気に掛かる。一刻も早くC1へ下山
してもらいたい。ところが、天候の移り変わりは
目まぐるしく悪天は長続きせず、白一色に模様替
えを済ませると薄日が射してきた。

B隊の荷揚げは完了し、C1に18時頃戻ってき
た。アタック体制完了。長い1日であった。ご苦
労様。

〔B隊の行動〕

C2への荷上げ日となる。3時起床。昨夜降っ
ていた雪はやみ、夜半には星空になっていた。

準備の早いA隊は荷上げ用の荷物を持ち先行す
る。少し遅れB隊も出発。4名のコンテでゆっく
り斜面を登ってゆく。夜が明け始めた。景色は360
度白く尖った山々の世界で美しい。

2時間ほどでFIXの取り付け点となる。3P
目ぐらいで先行していた鈴木さん、高橋さんが岩
崎さんを待っていた。高橋さんが体調不良のため
鈴木さんと二人でBCへ下山する。保坂さんはB
隊に合流し5名でC2へ。7PほどのFIXに登
り最後の大きな斜面にある積雪で埋まった3Pの
FIXを探しながら登る。その時点で視界10m程、
少しずつ天気は悪化してくる。6000m付近で大場
の歩みが遅くなり荷物を他の隊員に分配、個人装
備のみとなったザックも最後のFIXの手前でデ
ポする事になった。

雪面に埋まったFIXを見つけては順にユマール
で登る。登りきったところで先行した3名がもう
1P、FIXが欲しいと岩崎さんに伝え、保坂
さんがロープを引き最後の1Pを張り終える。そ
こから少し歩いたところにC2の旗があった。荷
物をC2にデポしC1まで下降。

3.AUG.00 5:00 B隊C1出発 8:00 BC
到着

昨夜C1に泊まったB隊は早朝BCに戻ってきた。
皆元気である。前日、下山した高橋も元気にな
った。昨日とは違って変わり天候は快晴で個人
装備を全て広げカラカラに干した。

〔B隊の行動〕

大神田さんの声で3時30分に起きる。とりあえず個人装備を片付けテントを出て準備する。最後にテントを片付け出発は5時。少しずつ明るくなる山々を見ながら順応した体は上機嫌。朝の素敵な散歩となる。岩崎さんと二人でコンテしながら無言のまま最後の下降地点まで。後から3人合流。いつもの順で懸垂。慎重にガレ場を渡り氷河を渡り8時30分、BCへ到着。コックから紅茶をもらう。

4.AUG.00 休養日

天候が良く、紫外線が厳しいが快適である。日が暮れると氷河を流れる小川はすぐに凍りだし、比較差が大きいことに驚く。一日に熱帯と寒帯がやってくる。(記：高橋)

8.AUG.00 停滞

天候が悪く、スパンティックは雲に覆われる。本日で実質5日間も休養日が続いているので気が緩まないように心がける。十分な休養を得、明日アタックのためにC1入りをする。(記：高橋)

〔B隊の行動〕

朝3時に出発するが岩崎隊長、鈴木さん、高橋さんの3名で行動について話し合い、雲が多いということで行動を中止とする。食事を済ませ今日はすっかり高台の高級住宅になってしまったテントを移動する事とする。隊長テント横のクレバスを挟んだ所が適している気がしたのでそこを整地する事になった。鈴木さんは明日出発する気であるようだ。さて、明日はどうなるか。

9.AUG.00 5:00 A隊C1に向けて出発。

10:00 南東稜稜線へ 12:51 C1到着。

日々、南東稜の氷雪壁は融け続け、壁に張られたフィックスロープのハーケンは浮き、ところによっては完全に外れ、ぶら下がっていた。再度打ち直さなければならず、鈴木、保坂ペアで手直し稜線へ。

曇り空で日差しが柔らかく、雪面も余りぬからずC1まで来れた。高橋はペースが上がらず荷を分担してもらおう。感謝。感謝。先々日から、南東稜上に多数の人影やテントが遠望でき、いずれの外国隊か気にしていたところ、デビット・ハミルトンを隊長とするイギリスの公募隊15名であることが判明した。

〔B隊の記録〕

BC停滞 5時にA隊出発。3人を見送り2度寝。8時に朝食をとりながら最初の壁を登っている3人を観察。FIXを直しながらなので出発から稜線に出るまで4時間かかる。以後3人の黒い点は北に移動。稜線上にあるテント4張りとはぶつかる。イギリスの公募隊が15名ほどいるようだ。山が込み合ってくるので早めに終わらせて下山したいものである。BCでは午前中トイレ掃除と明日の準備。午後はゆっくり休養し明日に備えようと思う。でもテントの外は雨だった。

10.AUG.00 停滞

午後4時の交信でBCは雨。C1は小雪。本日停滞と決定。午前10:00頃になると雪は曇りに変わり、雨のように降る。

11.AUG.00 停滞

前日から湿った雪が降っては融け、融けては降り、一晩中降り続けた。夜半、濡れたテントは酸欠状態に陥り、息苦しく何度か目を覚ます。午前3時の交信ではBCは前日から雨が降り続けているとのこと。視界が悪く行動は中止する旨の連絡が入る。午前4時30分再度交信。A隊も停滞を決定。

午前7時頃になると高曇りになり、チョゴルマン氷河が一時、見えたがガスが湧いてきて乳白色に染まる。昼頃になると雪が止み、気温上昇と共に氷の末端からしみ出る水を集める。C1は稜線上でも水が得られるので快適である。時折、ドドゴウーという雪崩の爆音がこだまする。

〔B隊の行動〕

BC停滞 停滞続き。休養と合わせBC滞在が1週間となり休みすぎで不眠症になる。昨夜はなかなか眠れずC1との3時の定時交信を遠くで聞きながらやっと眠りに入る。7時半、少しテントが明るくなり温度も上がる。メステントで朝食を済ませたが外はまだ雨が降っていた。本を一冊借り自分のテントに戻る。午後より雨がやみ、暇人達は外でトイレ整備、ゴミもやし、シュラフ干し、歯磨き等をして体を動かす。

それにしても黙ってLOがついて来る。なぜについて来るのか。ほかに欲しいものでもあるのか？

15時を過ぎた頃から気圧が少しずつ上昇し、外

が明るくなってきた。明日はC1に出発できそうだ。南の空が明るくなり久しぶりに青空を見る。

12.AUG.00 5:26 C1出発。7:00 スノーピークフィックス取り付け30分手前。イギリス隊7人と前後して進む。7:57 スノーピークフィックス取り付け。フィックスロープは全て埋没し掘り起こして進まなければならない。10:20 前半7ピッチ終了。11:45 後半3ピッチフィックス取り付け。12:53 上部フィックス終了点。小雪舞い、曇り空スノーピークを越えC2へ。13:20 C2到着 視界悪し。
B隊 5:00 BC出発。13:00 C1到着。

スノーピークのフィックス取り付け手前にはイギリス隊のテント村ができていた。そこを横目にユマーリングを繰り返してスノーピーク頂稜を目指す。

C2幕営地はスノーピークを越えた最低鞍部。スノーピークの頂上が晴れていれば見える近さである。方角的に南西へ下り気味に巻いた5分ほどの距離である。最低鞍部は幕営地に向いているが幅の狭いヒドンクレバスが稜線と平行して走っているので注意が必要だ。その脇にテントを張った。曇り空の天候のためC2から先のルートが確認できない。

明日、山頂アタックの予定であるが、雪が舞い視界も思わしくない。2日間連続で晴れてくれることを祈る。

13.AUG.00 アタック中止、上部ルート偵察。雲が湧き小雪が舞い続け、前日からの積雪が30cm。視界が悪くプラトールへ続く稜線が見え隠れしルートを追うことができない。アタック中止決定。6:30 早朝、イギリス隊3人の来訪に驚く我々と同じところにテントを張りC1へ戻る。私たちのフィックスやトレースを利用したのだろう。11:45 偵察出発 14:15 プラトールを縦断し山頂稜線末端を確認 15:00 C2到着。

C2を覆っていたガスが時折切れる。視界がとても悪くプラトールへ続く手前の稜線が見え隠れする。当然、スパンティークの勇姿は見えない。C1にいる隊長と交信、アタック中止と決定。その後、偵察のため山頂稜線末端の確認及び明日のラッセル軽減のためトレース付けに出発。

C2からプラトールまで稜線の幅は狭く30m~50m程。上部に行くにしたがって登りはきつくなる。

▼南東稜に抜け出る



方角は北または北北西に延びている。プラトールに出るとガスが晴れスパンティークの勇姿が大きく現れる。その左稜線がルートになることを確認する。プラトールは大変幅広く真っ平らな野球場が数百はできる広さである。その奥にスパンティークがそびえている。北北西または北西に進路を取ればガスられても問題はない。標識ポールを等間隔に打ちプラトールを縦断する。明日こそ頂上アタック。

14.AUG.00 A隊(第1次アタック隊) 4:45 C2出発。6:38 小休。プラトール縦断も終え、約10分ほどで山頂稜線取り付け。10:44 頂上直下、岩稜帯。14:04 スパンティーク山頂。15:00 下山開始。17:30 C2到着。B隊(C2入り) 5:00 C1発 13:00 C2到着

本日頂上アタック。

夜明けは5時頃である。紅茶とビスケットの簡単な食事で済ませ、薄明るくなるまでテントの中で待機。昨日のトレースが明確になったため出発。昨日、頂上稜線末端まで明確なトレースが刻まれているので安心して進める。トップに行く鈴木氏のペースが速くコンテニューアスで付いていくのは大変辛い。

プラトールから正面に鎮座しているスパンティークのルートを確認する。ところが、稜線末端付近で突然風雪になり、ホワイトアウトの状態で見界がまるで利かない。左稜線であることは間違いない。しばしツェルトにもぐり込みガスが晴れるのを待つ。時々顔を出し様子を伺うと急斜面が続いていることが確認できた。取りあえず直上することにする。昨日からの新雪が30cm程あり、まだ、

▼頂上にて（小泉と前列に大場(左)と大神田）



なじんでいないため斜面は雪崩れそうである。視界の利かない急斜面のラッセルは不安を増幅させ、余り気持ちのよいものではない。

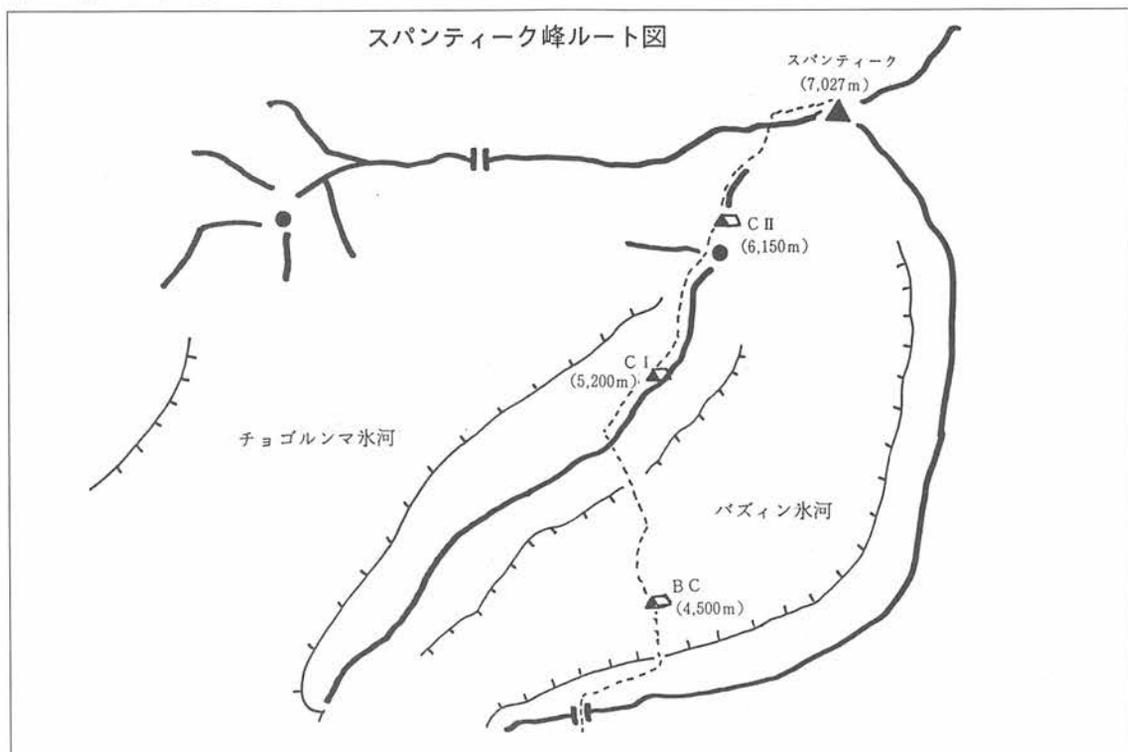
鈴木隊員が孤軍奮闘しトレースを付けていく。新雪さえ降らなければアイゼンが小気味よく利き快適な登りとなるのだが、傾斜がきついため深いところで腰までのラッセルが続く。稜線末端から雪崩を上へ上へと登り始めると、プラトーから見た黒々とした岩場の下部に到達する。黒いスレート状の岩場で小休後そのラインに沿って更に登り始めると花崗岩の茶色い、やや風化気味の丸みを帯びた岩が左手に見える。雪の中からボコボコと

出ているように見える。そこが本日の最大傾斜地である。その岩に沿って息を乱しながら登り始めると傾斜が緩くなり黒いスレート状の岩と花崗岩のミックスした緩い登りが続き山頂は近い。

カラコルムの展望台と異名を取るスパンティックの頂に立つと雲が360度わき上がり残念ながらK2やキンヤンキッシュ、フンザの村は見る事ができなかった。記念写真を銘々に撮り、1時間ほど滞在して下山にかかる。露岩地帯を越え雪崩そうな雪面を転がるように下る。プラトーへ続く真っ平らな雪面に逃れた途端ヒドンクレバスに肩まで落ちる。アンザイレンの大切さを改めて実感する。C2では隊長を始めB隊が登頂を祝ってくれた。感謝。感謝。本来ならばC1へそのまま、下山する予定であったが疲労が見えたためC2に泊まることになる。

15.AUG.00	B隊	3:30	B隊山頂アタック
		11:55	全員登頂 17:00 C2到着。
	A隊	11:50	C1へ下山。14:10 C1到着。

満月のため、スポットライトの明かりで一晩中照らされ続けたC2は、エスパース5人用に5人、2人用に2人とキューキュー詰めめの状態で一夜を明かした。放射冷却が昨日のトレースを固めB隊



の成功裏に繋がると感じた。B隊は2時起床の3時30分山頂に向けて出発。汁かけご飯の簡単な食事で済ませ銘々ヘッドランプの明かりを頼りに出発の準備をする。緊張感が漂い、登攀用具をガチャガチャと闇の中で響かせながらアンザイレンの一步が踏み出された。成功を祈る。

見送りを済ませたA隊はヘッドランプの明かりが闇に消えた頃、再度夢枕となる。太陽も昇り、テントの中も暖くなる頃、イギリスの国際部隊が賑やかに礼賛し6張りが追加され合計10張りのテント村がC2に誕生。

私たちはB隊へのジュースもできたので12時近くC1へ向けて下山。下りながら振り返るとスノーピークやプラトールそしてスパンティークの勇姿が今までにないくらい鮮明に浮かび上がり紺碧の空と雪と岩が眩しい。

第二次アタック隊、全員登頂の知らせが入る。B隊は長い一日を歩き続け、疲労と多くの感動をお土産にC2に戻ってきた。イギリス国際隊の祝福とルートに関して質問責めにあったようである。心から、おめでとう。

16.AUG.00 B隊 9:30 C2撤収下山。13:30 C1到着。A隊と合流。C1撤収。
A隊 14:30 A、B隊BCへ下山開始。15:20 バズィン氷河下降地点。18:20 BC到着。

B隊はC2を撤収し、スノーピークのフィックス10本全て回収しながら下山。A隊とC1で合流後BCへ下降。落石崩落地帯に気を使いながらフィックスは全て回収しバズィン氷河に降りた。氷河は1週間前とは比較にならないほど変化し、大きく口を開いたクレバスに驚く、やはり氷河は生きている。

ベースキャンプではコックのユーノスが我々を暖かく迎えてくれた。わざわざ冷たいジュースと暖かい紅茶のポットを両手に持ち、遥か向こうから氷河を歩いてくる。一人一人にワイルドフラワーのレイをプレゼントし、登頂の喜びを祝ってくれた。こんな素朴なもてなしは、私たちが失いつつある心の一片に潤いを与えてくれる。ビールで乾杯。カレーライスやケーキ、プリンとユーノスが腕によりをかけて作ったご馳走が食卓に並ぶ。しかし、胃が小さくなり苦しくて入らない。残念。

17.AUG.00 休養日

アタック時の日焼けで2回目の皮がむけ、顔がボロボロ。朝日が氷河上を照らすと寝ていられず、隊長とこの山の素晴らしさ、また総合的な技術を要する変化に富んだ山であることなど雑談をまじえて話が弾んだ。チャイを飲みながら輝く山々に囲まれて、一時の幸せを感じた。

本日は隊荷整理を兼ねた休養日である。アタック1週間分の洗濯や洗髪、そして個人装備の整理を行い、BC撤収の下準備をする。ゴミを燃やしてイクイン、イクアウトを実践する。周りの氷河が融けたため高床式になったテントを移動する。

18.AUG.00 10:30 BC撤収、出発。19:23 クルマ近くで幕営。

本日は明日BCを出発するための隊荷整理を行う予定である。天候はみぞれ、肌寒い。朝食中にユーノスがポーターがやってきたと慌てて知らせにきた。テントから顔を出すとポーター16名がみぞれの中、コルを越えてやってくるではないか、予定より1日早い。寝耳に水で、全然準備をしていない。BC撤収は明日である。ポーターを戻すことも可能であったがそこはパキスタン、2日間かけ、みぞれの中やってきた彼らをむげに断れば開き直り、私たちの足元を見て、もう来ないと言うに違いない。そうなればお手上げである。兎も角、出発するしかないと判断し風雨とみぞれの中、BC撤収にかかる。ポーター1人当たりの重量は25kgである。乾燥時と比較すれば雨で濡れたテントはやけに重くかさばり、ポーターの数が2人ほど足りなくなる。隊員で分担して待つことになり、みぞれの中の辛い撤収は慌ただしく終了した。

BC出発。バズィン氷河から尾根を越え、草付きを下る頃には徐々に雨も小降りになる。色とりどりの高山植物に覆われていた急斜面は今見る影もなく、季節の移り変わりを感じる。チョゴンマ氷河に降り立つ頃から天候が回復し雨具を脱ぐ。氷河からアブレーションバレーのポロチョン上がる地点が不明瞭でポーターから離れるわけには行かず、必死でついて行くが体力不足で辛い。隊長と足元が見えなくなる頃、ポロチョンとマンビホーラの間点、クルマという地名の幕営地に

到着。チャイの美味しいこと、疲れた体を芯から癒してくれる。

ポーターが一日早くきた理由は、イギリス国際とBC撤収日がバッティングしてしまい、彼らにとっての唯一の現金収入を両国から得たいと考え、この美味しい話を逃すまいという魂胆であった。そのため、無理を承知で日本の隊荷を一日早く下ろし、その足でイギリス隊へ向かう腹づもりであった。彼らのどん欲な、しかも一方的な考えに苦笑せざるをえなかったが、しかし厳しい社会、経済環境の中でしたたかに生き抜いている、一種の生きる力を感じさせずにはおかなかった。

19.AUG.00 6:57 クルマル出発 8:55 マンビホーラ 12:40 アランドウ村

夜半から雨になり、テントを打つ音がする。氷河上のBCと異なり、久々の土の上のテントは暖かく快適である。

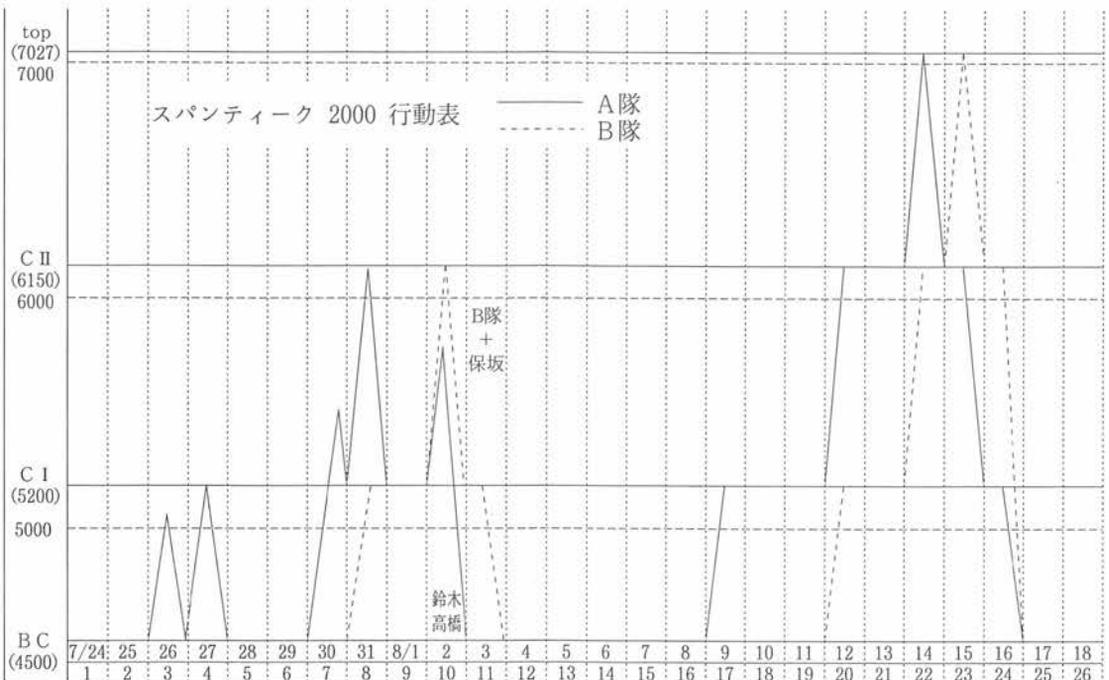
ポーターは一刻も早く目的地のアランドウ村に行きたがっている。そこでポーター料金(1550Rs)を受け取り、その足でポロチョに引き返し翌日イギリス隊の仕事を請け負うらしい。

テントから顔をのぞかせるとスパンティック、ライラ方面の氷河上部には厚い雲が覆っているが反対のアランドウ村方面は、青空が広がっている。

距離は長いがトレッキング気分が気楽になる。一本道の登山道といえるしっかりした道を進む。来たときには勇んで歩いた道である。風は来たときは明らかに違い、何となく秋の気配を感じる。カラッとした追い風が汗ばんだ背中を冷やしてくれる。マンビホーラを過ぎると多少疲れも出てきて荷が辛くなる。隊長、大神田隊員と前後しながらアブレーションバレーの道を進む。樹林帯を進みカルカを過ぎ、アブレーションバレーから再び氷河に降り立ち最後の氷河歩きとなる。遠方には黄金色に染まった小麦畑が遠望できアランドウ村が近い。チョゴルンマ氷河の舌端は氷河の色も白色ではなく複雑に堆積したモレーンにより黒々と汚れ、大小様々な凸凹を作りアランドウ村の外れで終わっている。

長い山旅も最後になり、ここからは俗世間に入る。スパンティックの山は奥深く、氷河も美しく再び訪れたい地だ。多くの感動を与えてくれた山々に心から感謝をし、別れを告げる。

A隊の記録は以上で終了。最後に多くの方々のご支援とご協力のお陰で、全員登頂の栄冠を得ることができました。合わせて個性豊かな隊員をまとめた隊長の人間性とリーダーシップに最大の賛辞を送り、感謝の気持ちで一杯です。これからも



スパンティックには多くのH A J会員の皆様が登ることと存じます。とても素晴らしい山です。何らかのお手伝いできれば幸いです。スカルドそしてイスラマバードまで、車中の旅はさらに続きますが安全に気を付け楽しみたいと思います。ありがとうございます。

(記：高橋敏雄)

本登山の実施に際しましては、キャラバン(大阪)の廣田様に多大なご協力を賜りました。紙上を借りて厚く御礼申し上げます。(岩崎)

つづやき

なぜなのか山頂に立つ感じが最後までしなかった。強い闘志とか山頂ねらいから離れた処に自分がいた感じがする。少しながらパキスタンの風土・文化・人々にふれ、岩崎さんならびに隊員の人達からヒマラヤ登山のノウハウを学ぶことができ、実り多い初めてのヒマラヤ登山となり、楽しむことができたのは一番の大きな成果でした。

(記：大場裕美子)

スパンティックの頂に立つ

保坂 巖

〔BC〕 4,500m

ポーター達が金を受け取り跳ねるようにして帰った後には今回のメンバー7名とLO、コック、キッチンボーイの計10名が残された。

一般的なBCは南東稜の末端付近らしいが、峠を一つ越えた此処の良い処は「本峰が正面に見える」と言うロケーションの素晴らしさに尽きる。

テントは全部で6張。4DK浴室無しの間取りである。便所はプラパールボックスで仕切った水洗式でクレバスという浄化槽に落す。但し紙類の可燃物は回収し郊外に新設した。9ℓ缶焼却場で一般可燃物といっしょに燃す。

洗濯や洗髪にはわずかではあるがお湯が使えた。着いてから雨が降ったり止んだりしていたので2日間は準備や読書に費やした。

隊はA隊(鈴木、高橋、保坂)とB隊(岩崎、大神田、大場、小泉)に分けられA隊がルート工作、B隊が荷揚げと決められた。

それから万が一の事態に備え隊長が行方不明になったときは鈴木氏、次に高橋氏と命令系統が決められ緊張感が走った。

〔C1〕 5,200m

7/26 7:00 A隊アンザイレンでC1に向け出発、氷河を30分ほど行き南東稜の側面に取付く。脆い岩場を息絶え絶えに登り雪壁の末端に着いた頃からヒュンヒュンと落石の嵐に出迎えを受けた。

とりあえず岩陰に身を隠して対策を練る。上部の雪面が完全に覆われていない数箇所が落石の発生源なのだが、その時の石の形状や大ききでバウンドが変わるため落石は広範囲に渡っている。そこで慎重に検討を重ねた結果、1人が見張り役で2人で固定ロープを張るというベストの方法で進むことにする。

突然、意思を持ったように音も無く加速度をつけて襲い掛かる悪魔に見張り役が「ラァーク」と叫ぶと後は個人の判断でおもむろに逃げるのだ。中にはフックやフライスするのがある為コースの見極めにセンスが問われる。スパッツをかすったのが1個で数10cmの所を「シュッ」と風切音を残していったのが2個、後は無難にこなした。

下を見るとB隊に登りはじめている。無線で落石注意を伝える。

この雪壁は中間付近で一度傾斜が緩くなりここまで来れば落石地獄から開放される。そして後半の5.6ピッチが今回最も角度がきつい所。

幸い全員無事で南東稜線上に立つ事ができた。ここからC1までは3時間くらいだが行動初日ということもあって少し先の岩稜帯にC1の荷をデポし陽の傾く(落石が落ち着く)のを待って4:00頃BCに向け下降を始めた。

翌日A隊は日の出前に落石帯を通過、昨日のデポを回収しC1まで往復した。ベースから見た南

▼C2へ帰幕した保坂隊員



東稜はそれほどの起伏は無いように見えるのだが、実際歩くと結構くるものがあった。

C1は稜線からチョゴルンマ氷河側に10m程下った岩場である。平たいスレート状の岩なので敷き詰めるといいテン場になる。岩なので暖かい、濡れないと良いことづくめ。テントも2張りは可能だ。天気の良いときは水がとれる。そのためガスの大幅な節約ができた。

正面には第2の核心であるスノーピークが白い巨体で身構えていた。

【C2】 6,150m

A隊はBCに戻り2日休養を取り再度C1に、そして7/31スノーピークのルート工作にC2に向け出発した。ここから先は落石の代わりにヒドンクレバスの落とし穴の罠がいたる所に仕掛けられている。下半身が埋まっただけなら笑えるが中には地球の芯まで届いているかのようなのがあり、アンザイレンは必須なのである。

今回支点としてアルミのストーパーも何本かは用意したのだが掘れば直ぐ氷が出てきてしまうため活躍の機会が無かった。

このスノーピークも中間より上の岩場付近が傾斜が緩くなっている。下部6ピッチ上部4ピッチ固定ロープを張る。そしてピークの左を回り込むようにしてコルに降りるとそこがC2だ。荷をデボし赤旗を建て直ぐ降る。

翌日は雨のため全員C1で沈殿。

8/2 C2へ全員で最後の荷揚げをしてアタックへの段取りは終わった。

【PEAK】 7,027m

BCに戻って3日間の休養を取り8/7がA隊

アタック開始の予定日だったのだが、悪天候のため2日延期となった。朝3時頃隊長が竹笛を吹きながら判断するのだ。さすがに2日続くと「3日目も多分」なんて思っていた所にGOのサインが出た。5日間も放置されたチタンスクリューはズボ々、ユル々状態で数本は抜け落ちていた。それを整備しながら登りC1に着。ところがここでも悪天に捕まり2日間の停滞を余儀なくされた。

A隊が動かないと当然B隊も動けない。荷揚げした食料、燃料は減る一方。しかし焦ってどうなるものでも無し。この辺の判断は難しい。

8/12 C2にあがる。そしてまた々翌日は停滞となってしまった。午後から天候が回復したので3人でプラトーまでレースをつけに行く。この6,400m付近に延々と続くプラトーが実は曲者でガスれば迷うし、ラッセルで時間と体力を使う割に高度はほとんど稼げないと来ている。

8/14 4:40 テントを出る。昨日トレースをつけた所までは順調に行く。天候は相変わらず悪く磁石を頼りに進む。時折山頂台座の稜線が見え隠れするがそれもつかの間。ツェルトを被って様子を見る回復の兆しは見えない。長いプラトーが終わりやっと山頂稜線に取付くがここから山頂まで膝から腰、深い所では胸までのラッセルになろうとは誰が想像したであろうか。

さすがに雪国山形の鈴木氏は強く先頭をガシタ行く。3交代制で進んだのだが、7,000mでのラッセル10分もすれば疲労はピークに達してしまった。本当のピークはなかなか見えてこないのに、それでも地道に進んでゆくと段々傾斜が落ちてきて山頂に達したことを知った。

2000年8月14日 PM2:00頃スパンティーク峰7,027m登頂視界は悪く期待していたK2やGIG2は見えなかったが「もうこれ以上登らなくいい」と思うと気は楽だ。

広い山頂のバズィン氷河側が雪庇状になっていてより高かったので後々のため万全を期し、一人づつ確保し最高地点まで行く証拠写真を撮る。

登り10時間かかった所を3時間で降りC2へ着。B隊とイギリス公募隊の祝福を受けた。

地域ニュース

《ネパール》

マチャプチャレ峰オープンか？

消息筋が伝えるところによると、これまで何度か「解禁」の噂のあった「マチャプチャレ」がオープンされるとの情報があり、カトマンズの「KTMポスト」(1月5日付)の一面に解禁反対の記事が出た。その他、春にはピーク45のオープンの噂もある。

《パキスタン》

日・パ旅行社が移転

日本隊の馴染みであるイスラマバードの「日パ旅行社」が1月下旬下記に移転した。

House No6, Bazar Road, G/6-4, ISLAMA
BAD P.O.Box 2253 ☎092-51-2824556, 287
4656, 2821254 FAX 092-51-2272958, 2820992
E-mail:nippagrp@isb.comsats.net.PK

尚、場所は、G/6-4 カバード・マーケット近くで、日本食レストラン「きまぐれ亭」がある。

トピックス

第39回海外登山技術研究会の開催

主催：(社)日本山岳協会

日時：2001年2月17日(土)13時～18日(日)14時

場所：八王子大学セミナーハウス

会費：12,000円(宿泊1泊3食)1日のみ参加希望者は5000円。また懇親会費3,000円要。

問い合わせ、申し込み先は、(社)日本山岳協会

内容：14～18時 セッションⅠ 記念講演

①A. ジュトレムフェリ(スロヴェニア)

②原真「20世紀の高峰登山を振り返る」

18時15分～懇親会

18日 8時半～10時半 セッションⅡ 高山病

「最近の薬物服用について」

登山報告／ヒマラヤ登山情報など

第22回高所順応研究会の開催

主催：東京都山岳連盟・海外委員会

日時：2001年3月4日(日)9時～17時

場所：国立オリンピック記念青少年センター
(小田急線参宮橋下車徒歩5分)

会費：3000円(昼食は各自でお願い致します)

問い合わせ、申し込み先：

〒104-0031 東京都中央区京橋1-9-9

湘南産業八重洲ビル401号

東京都山岳連盟 月～金(13時～17時)

電話 03-5524-5231 Fax 5232

内容：高所順応その前に(海外委員会)

肺水腫を体験して(山森欣一氏)

血中酸素飽和度について(新井康弘氏)

パルスオキシメーターとガモフバック(THI)

高所障害実例と対処(塩田純一氏)

Books

登っても登っても渴望のヒマラヤ

HAJの中心メンバーとしてヒマラヤで活躍し、その生涯をナンガ・パルバットで幕を降ろした、角田不二氏の遺稿、追悼集。

HAJ会員として比較的新しい私は角田氏との面識は無い。しかしHAJの諸先輩から氏の人柄、山に向けるストイックなまでの情熱は随分と聞かされてきた。そして今回、本書を読むに当たってさらにそれを実感させられる事となった。当時のHAJ内に漂うヒマラヤに対する狂気な世界が感じられ、大変うらやましく思う。

又、明治大学駿台山岳部在籍中の会報に掲載された論文は、現役大学生とは思えない理論で登山、組織の事を考え、それを実に上手い文章で表現している。

卒業後はトリス



ル、カンチ偵察、ケダルナート・ドーム、ヤルン・カン、ガンガブルナ、クン、冬期マナスル、ヌン、スークニャン、…といったヒマラヤ登山を精力的に行ない、その中で3度の遭難事故の体験。そして氏がひときわ思い入れが強かったナンガ・パルバット、その中でも超1級ルートであるルパール壁へと引き付けられていった過程は必然のように感じさせられた。その計画書内の一文を紹介したい。

「リーダーとして設定したメンバーの資格として」

1. 通常の山行きで冬期岩壁登攀を行なっている者。
2. 過去に6000m以上の場所での適正な順応能力を示している者
3. 準備活動を行なえる者
4. 個人負担金が支払える者
5. 遠征終了後もHAJ会員として残り、さらにより高度な登攀を目指す意欲のある者

「エピソードの中の一文」

(前略) 基本的には私は山はロマンでなければならぬと思っている。スポーツ的な記録の追求ももちろん重要なテーマには違いないが、基本はあくまでもロマンである。と信じて疑わない。ロマンのない山登りなど無価値である。山は単なるスポーツではない。(中略) 山は個性で追いかけるものであり、志向が一致した仲間こそカメラドであらう。今年、ナンガ・パルバットで久しぶりに自分流の山登りを思う存分に展開していきたいと思っている。すばらしい仲間とともに。

そして現在角田氏のヒマラヤに向ける情熱(ロマン)は、氏の大学の後輩に当たる、岩崎、中川両氏によってHAJの中心メンバーとして受け継がれている。

(記:野沢井 歩)

B5判 400頁(内カラー4頁) カバー・カラー
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号 日本ヒマラヤ協会 3500円(送料込み)

バトゥラ I 7785m

福岡山の会が1999年夏、パキスタン西部のバトゥラ山群の主峰に派遣した登山隊の報告書。登山は雪崩のため3名を失い中止された。「自分たちだけの高峰登山」を目指し、「限られた登山期間の中で、8000m峰のノーマルルートよりも、登山隊を迎えることの少ない7000m峰に価値を見出していた」とある。その姿勢

に拍手を送りたい。しかし、雪崩のためにその夢は碎かれてしまった。事故の原因解明が試みられているが、その内容を多くの岳人に紹介し、当初の志を普及浸透させてもらいたいと願う。

B5判 111頁 2000年11月10日刊

問い合わせ先: 〒810-0062 福岡市中央区荒戸1-1-1 柴藤ビル305号 福岡山の会 ☎092-721-0362

コズサル登山隊報告書

仙台一高山の会が1999年夏にパキスタン最西部の未踏峰コズサル(6,677m)に派遣し、初登頂に成功した報告書。2年前に偵察を行うなど周到な準備の末、初登頂に成功し各種の報告も要領良くまとめられているが、このような未知の地域に入った隊は、必ずテイクイン、テイクアウトの報告を行うべきであると思う。それが時代の要請でもある。

B5判 115頁 2000年12月28日刊

問い合わせ先: 〒981-1222 名取市上余田千刈田62-8 佐々木耕史

チョンムスターグ(6,962m)

早稲田大学・稲門山岳会が増設80周年を記念して中国、崑崙山脈に初登頂を目指して派遣した登山隊の報告書。2回の偵察行が効を奏して3名が初登頂に成功した。年配の成川隊員の「情報通信手段」など考えさせられる報告もあるが、未知の地域であるがゆえに「環境」の報告が欲しいところである。

B5変形判 97頁(カラー12頁)

2000年11月11日刊 〒162-0026 中野区西新井2-2-1(有)ランドコープ内 稲門山岳会

■財政支援: 嶋村芙美江、森田千里(各1万円)

東京集会のお知らせ

日 時	2月26日(月)午後7時～
内 容	ダイアモックス最近の話題
場 所	HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

氷河の旅① ハラモシュ・ラを越えて— 1

東野 良

〈それはあらゆるものとの比較を絶していた。見たこともないようなもっとも美しい光景、またこれ以上の美しさがこの世にまたとあろうかとも考えられるほどのものであった……

雪の湖の真ん中から雪のように白い幾つかの島山が、その基部を埋めて立ち並び、白い水でもあるかのように、限りない湾や入江となってその間に食い込んでいた。〉（コンウェイ「カラコルムの夜明け」）

〈はじめに〉

2000年の夏は、ほとんどをカラコルムの氷河で過ごすことになった。

3年前テレビ番組制作のため、シルバートートルのGⅡ登山隊に同行して初めてカラコルムに踏み入った。その時GⅡの最終キャンプ（7400m）から眺めた山と氷河の誘惑するような囁き声が、日がたつにつれて、わたしの胸の中で増幅されてきた。

点としての登山もそれなりに魅力はあるが、点だけではカラコルムの本当の姿を知ったことにならない。幾つかの地域を線で結びながらトレッカーとして歩き回り、その魅力を広がりとして表現できたら、山と氷河が囁きかける誘惑に応えられるのではないか、そんな思いが抑えられなくなっていた。

折りも折り、ヒマラヤをあまねく踏破し、カラコルムの隅々まで知っている写真家の藤田弘基氏から声がかかり、氏の撮影行に同行する形で3年続きのカラコルム取材が実現したのである。

計画では、まず、チョゴルンマ氷河をつめてハラモシュ・ラを越える。いったんスカルドに戻り、花のデオサイ山地で皆既月蝕を迎える。最後は、ピアフォ氷河を遡り、イギリスの探検家コンウェイが「カラコルムの夜明け」に生きいきと描写した雪の湖「スノーレーク」に至るというものであった。

藤田氏は、特殊カメラで高峰と星を撮影することを目的としていた。わたしはハイビジョンカメラと星の動きを撮影できる16ミリカメラを持参した。

期間は6月中旬から8月下旬までの76日間である。

〈花咲き匂うチョゴルンマ氷河〉

チョゴルンマ氷河へはスカルドの先でインダス川を渡り、尾根を一つ越えてシガールの緑豊かな穀倉地に下りる。バルトロやピアフォ氷河への玄関口アスコレへの道と別れ、シガール川にかかる立派な吊り橋を渡って、バシャ川にそって登って行く。温泉場のあるチュートロンで昼食となる。温泉の湯量は豊富で、浴室もしっかり作られている。下山時ならぜひ一浴びしたいところだ。

ジープが入れるのはドコまでといわれていたが、最終集落のアランドウ（Arandu）まで入れることがスカルドに着いてわかった。だが、ドコとアランドウの間は道が狭い上に路面の状態も最悪で、まったく肝試しのために作ったような道だ。これまで経験したカラコルムのジープ道のなかではもっともスリルがあった。はるか足下、激流の餌食になってしまうかどうかは、ドライバーの裁量次第だ。ただし、キャラバンが一日短縮できたのはありがたかった。

アランドウの婦女子の服装は、実はカラフルで豪華である。キャンプ地に急ぐ途中でよく観察ができず、写真をとることもできなかったのも、よくは言い表わせないが、祭りか何かあるのか、あるいはわれわれを歓迎してるのかと、一時は思った。が、違った。普段着だという。アランドウの地は草に恵まれて家畜も多く、ここの暮らしはバルチスタンでは最高位なのだそう。乳製品はほかに販売できるほどの生産があり、ブルーチーズも作られているという。機会があればもういちど出かけてみたい、桃源郷の趣がある村だ。

6月22日、アランドウで15人のローカルポーターを加え、チョゴルンマ氷河に踏み出す。緑の麦畑を少し行くとすぐに氷河である。末端に近いところを横切っ

▼ハラモシュとマニピーク上空の星(撮影・藤田弘基)



て左岸のサイドモレーンに上る。ここからは放牧の道がしっかりしていて歩きやすい。

ハマナスに似た真紅のバラ、ヒマラヤンローズが強い芳香を放ち、ハギの群落が氷河の両サイドを赤い帯のように縁どってしばらく尽きない。緑の斜面を放牧の牛の群れが、スパンティーク(7027m)の真っ白なピークを背負ってゆったりと移動している。敵から襲われないよう、バラの刺木の中に巣づくりをする小鳥のさえざりに心がはずむ。カラコルムの初夏はのどかである。

初日はマンピークという砂の広場にテントをはる。アランドウの夏村(放牧拠点)があり、広場は牛たちの遊び場のようで、落とし物が多い。夏村には女の姿はなく、いささか色気に乏しい。

〈氷嶺にきらめく満天星〉

バルチュ氷河手前のガリンチョのキャンプをへて、三日目にチョゴルンマの白い氷河に下り立った。氷の上を清れつな水が流れている。

チョゴルンマ氷河の長さは40kmほどで、カラコルムではそれほど著名ではないが、源頭にスパンティークやマルビティン山群(主峰7458m)など七千メートル以上の高峰がひしめいている。

氷河の源頭まではまだあるが、わたしたちは、左からハラモシュ氷河が合流するあたりのデブリをならして、4100mの氷河上にキャンプ地を作った。今回は星空の撮影が主たる目的であるから、空が開けていないといけない。あまり高峰に近づくとも空がふさがれる。キャンプ地のすぐ前はセラック帯となっていて、氷の柱が林立しているので、写真の前景として申し分ない。

このキャンプ地から西の方にカメラを向け、左にカ

メラを振っていくと、スパンティーク、マルビティンと続き、最後にライラ(6985m)の均整のとれた三角錐が画面に収まって締めりのよい映像となる。

真っ白に化粧したライラの頂上部は、ピラミッドより鋭角的ではあるが、槍のように鋭くはない。近づきがい美しさと冷たさを持っている。

ライラという名前は、ドイツ人の登山家が、イスラム文化圏に伝わる悲恋物語のヒロインの名前からつけたという。気品という言葉はこのような山にこそ与えられるべきであろう、と納得する。

わたしたちはこのキャンプで四夜を過ごした。天気は良好で、氷河源流に立ち並ぶ山々が、朝な夕な金色に染った。ライラの朝がとりわけ美しく輝いた。夜空を埋め尽くす星々が、氷の頂の上を静かに旋回していく様子は、たとえようもなく神秘的であった。わたしたちの氷河の撮影行は幸先のよいスタートとなった。

〈風雪のハラモシュ・ラ〉

6月28日、キャンプ地の左から合流してくるハラモシュ氷河を遡って、ハラモシュ・ラ(峠)に向かう。一時間ほど氷の上を歩いたあと、右側、ライラピーク側の草付きの斜面に取りつき、トラバースしながら上る。4400mは越えているのに斜面は花園であった。黄色のヒナゲシ、ベンケイソウ、紫紅色のアズマギク、空の色を濃縮したワスレナグサ、白いアマナ、アネモネが夏を謳歌している。花畑の先にハラモシュ(7409m)がまぶしい。

先がガレ場となり、再び氷河に下りる。身軽なパーティーなら峠まで一日でも可能だろうが、大部隊なので氷河の中間点で一泊する。夜は下部キャンプよりも温かく感じた。天気が変わりつつあったのだ。

朝から氷河を覆う雪が柔らかい。ヒドンクレバスが恐いので、ハイポーター二人をアンザイレで先行させ、ルートを探らせる。これを見た荷担ぎのローポーターたちも「ロープが欲しい」というので、数珠つなぎで進ませた。しだいに去来する雲が多くなり、上空に青空はなくなった。晴れば暑いカラコルムの氷河も、曇ればさすがに寒い。標高は4500mをはるかに越えている。雨や雪にならないうちに峠に着きたいと急ぐ。

峠への最後の詰めは、右手のやや急な雪の斜面に取りついてトラバースする。中央から左手にルートをと

れば深いクレバスにつかまってしまう。

ハラモシュ・ラ(4800m)に着いた時は、悪天の部類に入る天候だった。雪まじりの風が強く、視界は閉ざされていた。峠の先への期待が満たされるまでは、数日待たねばならなかった。

峠そのものは雪に覆われていたが、右側の稜線が落ち込む斜面は岩屑が露出していた。いくつかテント地はあったが、全員が宿泊するには狭かった。ポーターたちは岩を崩してテラスを作り、風よけの岩で囲って新居を作る。かれらのキャンプ地の工作能力にはいつも驚かされる。もちろん彼らの家作りの材料も野にある石が主体だから、お手のものなのだろうが。

キッチンテントまで設けるスペースは無く、炊事はブルーシートの中でしてもらうことになった。藤田さんは稜線を5分ほど上ったテラスに、皆から離れてテントを張り、近くに撮影台を作った。テントを出れば即撮影という態勢である。

〈峠は民族の境界〉

ハラモシュ・ラは、東のバルチスタン地方と西のギルギット地方の境をなす峠である。われわれのポーターは、アランドウも含めてバルチスタンの民である。峠の向こう側のクトワール谷の住民とは言葉も違うという。

ハラモシュ氷河の周りは宝石の産地で、クトワールの谷からは宝石とりが越境してやってくる。アランドウの住民たちは、自分たちの土地が荒らされるのを黙ってられないから争いになる。こんな時は表にでないが血をみるのは当然である。詳細は不明だが、数年前の越境事件は訴訟ざたになり、越境した側に不利な判決となったという。一件落着きたいのだが、そうしたトラブルが裁判で掃されるほど、古くから民族の対立というのは単純ではない。

アランドウのポーターの何人かは「やつらはオレの顔を知っている。できることならここから引き返したい」と、クレバスの恐怖よりも、峠から先の谷に下りることに大いなる恐怖心を抱いていた。報復される恐れもあるからだ。われわれも、この峠に到達する前から、いかにかれらが徹対国を安全にトラブルなく通過できるかに少なからず心を砕いていた。しかし、これは下りてみなくてはわからない。ハラモシュ・ラでの仕事をすませてからのことだ。

▼ハラモシュとクトワールの谷



〈サンリが徘徊する高峰〉

「この夏のカラコルムはおかしい」と藤田さんがいう。私もそう感じる。

二年前、GII登山の時も、晴れの確率は低かったが、今回はそれ以下だ。カラコルムブルー、あの青空が長続きしない。ハラモシュ・ラに着いてからは、強風、雪、おまけに雷である。狭いスペースに張ったテントが吹き飛ばされてしまうのではないかと心配になる。

「こんな天候では登山の連中も大変だろうな」と自分たちの境遇はさておいて、成田からの飛行機で一緒になったHAJグループのことを気遣う。

ハラモシュ・ラが晴れたのは四日後の夕方だった。藤田さんの撮影ポイントにかけのぼって、初めてまわりの風景を見ることができた。

キャンプ地のあるコルをへだてて雪をたっぷり乗せた稜線が南に伸び、その右奥に円みのある頂をのぞかせているのがマニピーク(6685m)である。さらに稜線伝いに右に目を移していくと、ハラモシュ(7409m)のピークが夕日を受けとめて赤く染まりつつあった。ハラモシュの西壁からは、いく筋もの氷河が流れ落ちマニ氷河に合流している。

マニ氷河の西サイドは、広々とした緑の谷であった。その中に、ブルーの目のような湖が見えた。クトワール湖である。

マニ氷河の西サイドは、広々とした緑の谷であった。その中に、ブルーの目のような湖が見えた。クトワール湖である。

ハラモシュのピークからマニ氷河のある谷底まで4000mある。富士山以上の高度差の岩壁を雪崩がしきりに滑り落ちる。

ハラモシュ・ラを撮影地の一つに選んだのは、高峰を指呼の間に眺め得る峠は、ここを歩いては求めることができなかったからだ。マニピークはもう少し装備を充実させてきたら、わたしにも登れそうな近さにある。マニピークは、1958年、ハラモシュに成功したオーストリア隊によって登られている。

わたしたちは、これらの高峰群を見下ろしながら夏の夜空を徘徊する「サソリ座」をぜひ撮影したいと願って、氷雪の峠にやってきた。

だが、天気は長持ちしない。からりと晴れた夜がほしいのだが、夜間も雲が発生しやすいので、長時間露光で撮影しているうちに星が消されてしまう。

予想以上の長期戦になった。食料、燃料が乏しくなってきたので、ポーターたちをいったん下山させ、わたしたちの撮影が済んだら上ってきてもらうことにした。ポーターたちは恐れながらも、敵陣の谷へと下りていった。

わたしは、7泊のハラモシュ・ラ滞在中で、何とか見せられそうな映像をものにできた。

マニピークやハラモシュの白い峰に、腹をこすりつけるように夜空を這っていく巨大な「サソリ座」は圧巻であった。

しかし、藤田さんは納得できる写真がとれていない。この峠で撮影するのは2度目だが、60歳を過ぎて、また来れるという保障はない。3人のトレッキングスタッフとともに、藤田さんは残留することになった。

〈恐怖の谷 クトワールへ〉

テレビスタッフの一人が鼻から出血し、脈もすこし不整ぎみなので、わたしはエスコートしてクトワール側に下りることになった。ポーターたちが敵陣でどうしているのかも気懸かりだ。

ハラモシュ・ラからギルギット側のクトワール谷への下降は急崖である。上部の雪の部分には先に下山したポーターたちのために、3ピッチのロープをフィックスしておいたので安心して下れた。だが、その下からは雪が消え、ボロボロの崖を落石に注意しながら下る。半分ほど下ったあたりからは踏みあとがあって、ほっとする。

谷の底まで標高で1700m。三時間ほどで久しぶりに緑の草地に足を踏み入れることができた。放牧の牛や山羊が豊かな草を食んでいる。

疲れた足でだらだらと下っていくと、柳やダケカンバの樹林を伐り開いた中に集落があらわれた。「マニキャンプ」である。百戸ほどの粗末な木造の家が立ち並んでいる。この谷を下った先に点在する村々の夏のキャンプ地である。

カラコルムの夏村は、男たちだけだったり、女たちだけだったりするが、このキャンプには老若男女かわわず、一家して移動してきているようだ。小川べりで女たちが洗濯しているかたわらで、こどもたちが水遊びをしている光景が見られる。

先に下山したポーターたちは無事でいた。家を作るのを手伝ったりしながら、敵陣の軒下を借りて過ごしていたという。

マニキャンプは、背後にハラモシュの西岩壁を背負い、いく筋かもの懸垂氷河と緑がコントラストをなす美しいところだ。村の様子を撮影したいと思ったのだが、ガイドは「止めたほうがいい」という。実は、このキャンプでは、二年前アメリカ人夫妻が銃で襲われ、夫は即死、妻が重傷を負うといううとましい事件が起こっているのだ。

ポーターたちは無事だったし、無益なトラブルは避けたい。撮影はあきらめて、村の中を足早に通り過ぎ、村外れのクトワール湖岸にテントを張った。クトワール湖は直径100m足らずの小じんまりした湖だが、水深もあり、澄んだ水を湛えて美しい。こども達の水遊び場になっていて、わたしたちも20日ぶりに体を洗った。

キャンプに戻ると、回りは大ぜいの人ばかりだ。大半はこどもたちで、われわれの一举手一投足を見張っている。目が痛い、背中が痛いから見てくれ、薬をくれという老人たちもいる。



▲マルビティン(左)とスパンティーク(右)

パキスタン新ビザ政策について

— 2000年10月16日発布 —

一般観光旅行ビザ

1. 全ての観光旅行者（別添リストに属す国の国籍を有するものを除く）は、到着時に空港または、それ以外の入国場所にて、30日間の滞在が許可される。
2. 各地パスポート事務所は、滞在許可期限内に申請がなされた場合は、3ヶ月までの入国ビザ（Entry Visa）を発行する。
3. 申請がなされれば、更に3ヶ月の延長も、認められる。
4. 各地パスポート事務所は、観光旅行者の申請があれば、相互条約を基本とするビザ取得代金を最低限度額10\$として、1回ないし2回の再入国査証（Re-entry Visa）を発行する。
5. 北方州については、ギルギットの副知事に、北方州の観光旅行者のビザ延長、または、1回の再入国許可の権限が与えられている。ビザ代金は、政策による。副知事は、副知事自身がその権力を使用するものであり、その権力は、部下に、委任されるものではない。

警察署における外国人登録

1. 外国人登録は、長期にわたっての規則であったが、別添リストの国籍を有する者以外は、警察署での外国人登録が、免除される。

2. 更に、管理上の分類（別添リスト）を受けている国籍を有する者（インド人、もしくは、インド国籍を有する外国人を除く）で、就労許可／ビザ等の発行を受けていれば、警察署での外国人登録から免除される。

注意：

▶ここに発布された政策は、管理上の分類（別添リスト）を受けている国籍を有する者、インド人（どの国に居住していたとしても、また、外国人であっても、インド国籍を有するもの）を除く、全ての旅行者は、到着時に空港または、各入国場所において30日間の滞在が許可（Visaではない）されると言うものである。

▶各地パスポート事務所は、滞在許可期限内に申請があれば、3ヶ月迄の入国ビザを発行する。それらの事務所は、申請があれば、更に3ヶ月の延長を認める。それらのパスポート事務所は、相互条約をもとにした、最低額10\$のビザ取得代金で1回ないし、2回の再入国査証を発行する。

尚、インド、ブータン、スリランカ、イラクなど上記規則を適用されない国が17ヶ国ある。

この法令は、一般観光旅行者、トレッキング隊に対するものであり、登山隊においては、現時点では正式な発表がなされていない。（資料提供：日パトラベル）

パキスタン2000年登山結果

	山名	国名	隊長名	隊員数	登山期間	結果	摘要
1	ガッシャーブルムⅡ	スペイン	Kari Kobler	7	6/15~8/2	○	1名転落死亡
2		スイス	Hansruedi Wirth	7	6/15~8/2	〃	
3		スペイン	Felix Inurrategui	7	6/12~8/1	×	
4		スイス	Marcel Karraz	5	6/15~8/2	○	
5		ドイツ	Ralf Dujimovits	7	6/12~8/4	〃	
6		ドイツ	Herbert Baumbach	6	6/12~8/4	〃	
7		スペイン	Luis Carlos Garranzo	7	6/10~7/26	×	
8		イタリア	Dibona Mario	4	6/17~7/31	○	
9		スペイン	Luis Urkia Ibabe	7	6/12~7/27	×	

	山名	国名	隊長名	隊数	登山期間	結果	摘要
10		ベネズエラ	Jose Delgado	7	6/5~8/7	○	
11		仏	Chatrefou Denis	7	6/28~8/10	〃	
12		仏	Le T.J.R.Des Edelweiss	7	7/1~8/15	〃	1名転落死亡
13		スコットランド	Henry Todd	5	6/17~7/28	〃	
14	ガッシャーブルム I	スコットランド	Henry Todd	5	6/17~7/28	×	
15		ドイツ	Ralf Dujimovits	7	6/12~8/4	〃	
16		スペイン	Felix Inurrategui	7	6/12~8/1	〃	
17		ベネズエラ	Jose Delgado	7	6/5~8/7	〃	
18	ブロードピーク	英	David W.Hamilton	4	6/5~7/21	〃	
19		スウェーデン	Roger Reinhold	7	5/30~7/25	〃	
20		イタリア	Josef Rybicka	9	6/14~7/25	〃	
21		ハンガリー	Devid Klein	7	6/9~8/11	○	
22		日本	名塚 秀二	3	6/14~8/11	〃	
23		韓国	Park Young Seok	7	6/24~8/19	〃	
24		日本	近藤 和美	10	6/1~8/23	〃	
25	K-2	イタリア	Hans Kammerlander	5	6/1~7/25	×	
26		韓国	Han Kyu Yoo	12	6/24~8/7	○	
27		韓国	Lee Sung Won	11	5/11~7/14	〃	
28		韓国	Wi-Yeong Kim	7	5/25~8/12	〃	
29		ブラジル	Waldemar Niclevicz	3	6/5~8/10	〃	
30		米、国際	Gray Scott Pfisterer	11	5/30~8/19	〃	
31		韓国	Park Young Seok	7	6/24~8/19	×	
32		日本	近藤 和美	10	6/1~8/23	〃	
33		日本	寺沢 玲子	5	6/15~8/24	○	
34	スバンティーク	仏	Pellissier Emmanuel	7	5/17~6/23	〃	
35		米/露	Lev Loffee.	3	7/10~8/7	〃	
36		日本	岩崎 洋	7	7/15~8/23	〃	
37		英	David Hamilton	17	7/29~8/25	〃	
38		仏/バキ	Umer Bin Abdul Aziz.	6	7/17~8/28	×	
39	ナンガパルバット	イタリア	Reinhold Messner	5	7/1~8/3	〃	
40		スイス	Ehard Loretan	4	7/24~9/1	〃	
41		韓国	Hong Ki Kun	9	5/26~7/20	○	
42		ベルギー	Mangelschots Guy	2	6/21~7/19	×	
43		スペイン	Ruben Aramendia Perez	7	7/3~8/5	〃	
44	ラカボシ	英/米	Adrian Burgess	3	6/19~6/29	×	
45	デイラン	日本	細田 一郎	1	7/19~8/8	〃	
46		英	Simon Yetes	4	7/15~8/10	〃	
47		スペイン	Pasqual Garriga Marti	6	7/31~8/31	〃	
48		イタリア	Nicol Berzi	11	7/17~8/5	〃	雪崩、2名死亡
49	チョゴリザ	スペイン	Jose Corlos Tamayo	7	6/15~8/8	〃	

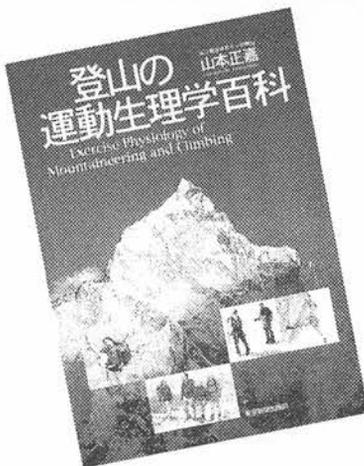
	山名	国名	隊長名	回数	登山期間	結果	摘要
50	ブマリチッシュ	英	Rober Payne	2	5/17~6/14	〃	
51	バインタ ブラック	アメリカ	Douglas K.Chabot	2	6/15~8/4	〃	
52	ウルタルII	仏	Jerome Blance Gras	4	5/6~6/17	〃	
53	ラトックIII	ロシア	Alexander Odintsov	5	6/22~8/5	〃	
54	ラトック(北稜)	アメリカ	Thomas George Nonis	2	6/28~8/16	〃	
55	ラトックV	日本	大宮 求	5	8/2~8/26	〃	
56	トランゴタワー	独/スイス	Richter Michael	8	6/24~8/10	○	
57		メキシコ	A.D.de la Vega Angel	3	7/11~8/26	×	
58		アメリカ	Tim O.Neill	2	6/28~9/1	〃	
59	ノシャック	デンマーク	Martin Sondery Nielsen	5	6/24~7/31	〃	
60	ブーパラッシュ I	日本	中山 秀樹	3	7/22~8/21	〃	
61	ドゥルフィカ	英	Scott Elbourne	6	7/4~7/28	〃	
62	イストロナール	スイス	Simon Perritaz	10	7/4~8/31	〃	
63	ディルゴルゾム	日本	南井 英弘	5	7/10~8/21	○	
64	ドゥリチッシュ	仏	Yann Delevaux	3	8/30~10/4	×	
65	ホンプロ	スペイン	Jose Carlos Tamayo	7	6/15~8/8	〃	
66	オグレIII	イタリア	Mavrizio Giordani	5	6/6~7/8	〃	
67	無名峰(7,010m)	仏	Nicolas Sieger	4	7/29~8/29	○	

(資料提供：日・パ・トラベル)

「身体の仕組みを知って、安全登山を!!」

登山の運動生理学百科

山本正嘉 著 (国立鹿屋体育大学助教授)



「登山で疲れる原因は何か」「中高年や女性登山者でも快適に登るためには?」「適切なトレーニングABC」「あなたにもできる高所登山」など登山全般を網羅。

初級者からベテランまで幅広い登山者を対象に、登山と健康、疲労、中高年者・女性の山歩き、トレーニング法を詳述。クライミング、高所登山も科学的データをもとに解説。著者は、ヒマラヤをはじめとする高所登山家であると同時に、スポーツ生理学の専門家。

●A5判・並製 ●価格：本体2000円+税

東京新聞出版局(中日新聞 東京本社) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎03-3740-2674(直) FAX03-3458-0689

■ 寸 感 ■

「20世紀 日本のヒマラヤ登山アンレイト調査」が苦戦している。このアンケートは、全会員と会員外有識者に配布し、関心のある方のみ協力をお願いしたものである。

50年間近くに及ぶ日本人のヒマラヤ地域での行動について概略をまとめておく必要を感じる。全ての項目に完全に回答することは困難かも知れないが、この機会に過去の登山史を少し勉強して載せて是非共アンケートに協力をお願いしたい。(山)

事務局日誌 (1月)

- 9日(火) 仕事始め
ヒマラヤ351号発送
- 13日(土) ヤンラ・カンリ隊々員へ通信発送
- 16日(火) チベット旅遊局歓迎会(於、芝パークホテル 山森、岩崎)
- 20日(土) 日山協B級スポーツ指導員養成講習会(講師、山森)
- 24日(水) 「山岳4団体 山岳保険・共済懇談会」

(於、HAJ 山森、中川)

28日(日) 第22回インド・ヒマラヤ会議(於、豊島勤労福祉会館、31名)

「岩崎洋、中川裕大厄払いの会」
かんぼヘルスプラザ東京

29日(月) 「白川議員猪突猛進の会」(於、ホテルパシフィック、山森、尾形)
東京集会 (15名)

ヒマラヤ No.352 (3月号)

平成13年2月10日印刷 13年3月1日発行

発行人 山森欣一

編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社*

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。

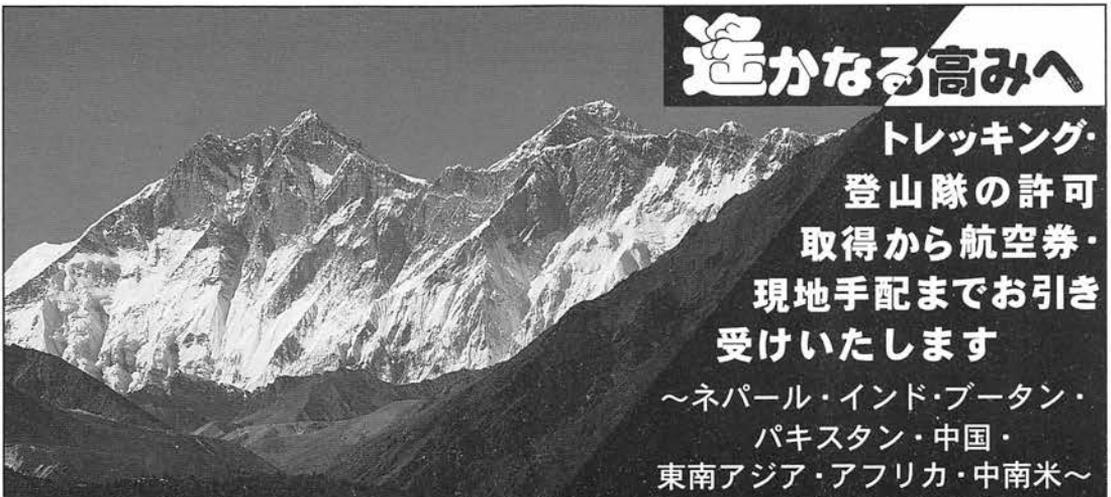


マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号



遙かなる高みへ

トレッキング・
登山隊の許可
取得から航空券・
現地手配までお引き
受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・
パキスタン・中国・
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のバイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎03(3237)1391代 FAX 03(3237)1396
〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎06(6367)1391代 FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに!



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384代 FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060代 FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤルをご利用下さい
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブルーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区福岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004